越前の禅宗草創期について（追補）

池田正男

はじめに

先に同タイトル[1]で上梓したが、脱稿した後、曹洞宗宏智派安居弘祥寺の草創について重要な史料の存在が明らかとなった。さらに同寺の地理を調査して新たな知見が得られたので、それを加味して前稿を追補したいと思う。

1　安居の朝倉氏関係寺院

1・1　弘祥寺・大孝寺の礎となる常在院

『朝倉氏の家訓』と『越前朝倉氏の研究』[2]が相次いで刊行され、前者は「朝倉家伝記」、後者は「壬生本朝倉家譜」[3]と題された京都大学総合博物館蔵本の翻刻文が載せられた。

そこには朝倉氏と寺院の関わりについて記されていることが注目される。

・弘祥寺・大孝寺の草創について

「空海八十五歳之時ニ貞和二年：常在院エ寄進アツテ、常在院開基義演和尚ノ弟子ト成、名ヲ云覚性、初ハ常在院エモトツイテ自是弘祥寺ヲ建立セント願ヲ立ツ」

この記述について「春沢録」[4]に「朝倉前美作守左金吾空海覚性大禅定門　二百年忌拈香：天文二十年辛亥、二月二十九日：開弘祥基則建寺度僧非無功徳、入義演則捨財施仏有積善余慶」とあることにより「朝倉家伝記」の記述の妥当性が裏付けられよう。

なお当「伝記」は朝倉氏第四代孝景の逝去で筆止めとなっていることに加え、その逝去の年となる永禄十二年（1569）を基準に「何年也」との記述をしていることから、当「伝記」がこの期の成立とみられる。よって朝倉氏全盛期成立の伝記であり、その記述は信憑性が高いものと考えられる。

当稿では広景から家景までを初祖広景、六祖家景などと記し、英林孝景から義景までを第一代孝景、第五代義景などと記すこととする。また「朝倉家伝記」と「壬生本朝倉家譜」については「伝記」と記すこととする。

冒頭に挙げた「常在院開基義演和尚」の記述を検討してみたいと思う。義演和尚と言えば永平寺四世義演が思い浮かぶ。まず当伝記の記述の妥当性を検討する。

まず貞和二年（1346）に空海（朝倉氏の初祖広景）が常在院開基の義演和尚に帰依して領地を寄進し、当地に弘祥寺を建立しようとしたと記すことと、弘祥寺創建を康永元年（1342）とする記述は順序が逆である。また貞和二年とすれば広景は九十二歳にもなってしまう。これは広景の年齢八十五歳の記述が正確だとすれば貞和二年は暦応二年（1339）の記述の誤りと考えられる。このことを念頭においても永平寺第四世義演和尚の示寂を正和三年十月（1314）として二十五年ほどの開きがある。

また当伝記の続きに「公私ノ憚リアリトテ弘祥寺ヲ亀山法王ノ御祈願所定ム」とある記述についても、亀山法皇の逝去は嘉元二年（1304）であるから、貞和二年（暦応二年の誤記か）の記述は成立しない。

ここで関係事象の年表を挙げておく。

・年表

1254　建長六年　初祖広景生誕
1294　永仁二年　別源円旨生誕
1304　嘉元二年　亀山法王逝去
1314　正和三年　義演示寂
1314　正和三年　二祖高景生誕（広景六一歳）
1334　建武元年頃　紫岩和尚生誕（高景弟の子）

1339　暦応二年　広景常在院へ寄進（八五歳）
1342　康永元年　弘祥寺開創（別源四十九歳）
1352　文和元年　広景逝去（寿九十八歳）
1364　貞治三年　別源示寂（寿七十歳）
1374　応安五年　高景逝去（寿五十九歳）
1551　天文二十年広景二百回忌
1569　永禄十二年第四世孝景逝去、伝記成立

それぞれの年齢差を整理すると

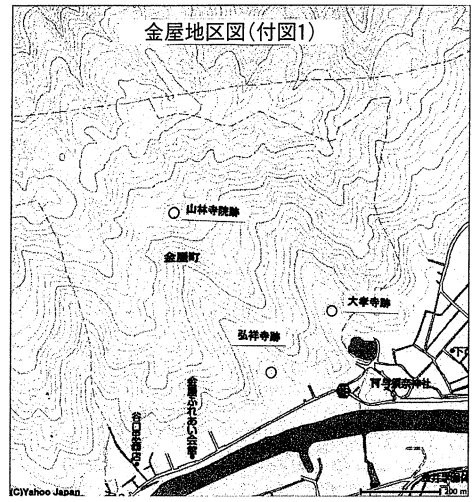
初祖広景―別源円旨―二祖高景―紫岩和尚
　　四十年　　二十年　　約二十年

このように初祖広景との年齢差からみても広景の記述はかなりの無理を重ねたきらいがある。

また前述の貞和二年の記事に関して、伝記の作者は広景の年齢が七年のズレが生ずるミスを犯したのか。これは貞和二年の証文を挙げながら、広景の事績を結びつけようとするあまり、広景の年齢を取り違えるミスを起こしたのではあるまいか。もとより広景に関する記述は２００年以上も前の伝承をもとに記したものであるから、信憑性には疑問がある。

１・２　弘祥寺・大孝寺跡及び山林寺院跡

弘祥寺跡・大孝寺跡の地理について検討を加えてみたいと思う。（付図１参照）



金屋地区図（付図1）

図示のごとく西側の谷口に弘祥寺跡があり、隣り合う東側の谷口に大孝寺跡がある。両寺を挟む峰を少し登った地点には安居城跡と伝えられる開削平地がある。さらに弘祥寺跡と大孝寺跡からはそれぞれ歴史を感じさせる参道が山上に向けて伸びている。山上（標高２６０ｍ）から８０ｍほど南下方（標高１８０ｍ）には開削平地があり、その西方は東西５０ｍ、南北１００ｍ、東方は東西２００ｍ、南北３０ｍほどの広さである。ここは金屋町７字長者屋敷となる。筆者はここを山林寺院跡とみる。

中世の文献に「弘祥寺十境」として冒頭に「頭陀峰」が挙げられている。頭陀とはサンスクリットの「ドゥータ」を音写した言葉で、「衣食住に対する欲望を払いのけること。転じて、あらゆる煩悩を払い去って仏道を求めること。また、そのための修行。僧が修行のために托鉢して歩くこと。また、その僧」とある。このことからみても弘祥寺の裏山の峰上には古くから修験の道があったことが窺われ、中腹にある開削平地も山林寺院跡であった可能性が濃厚となろう。また当地の地名「安居」も仏教用語であり、弘祥寺草創以前から用いられていることからみても同様のことが言えよう。

なおこの山上峰を西方に５ｋｍ行った地点には泰澄開基の高雄権現と称する山林寺院跡が存在する。

この山塊は旧丹生郡と坂井郡の郡界でもあって、修験にとって好適な山塊であって、その麓には大安寺（旧田谷寺）、岸水寺、一王寺、浄土寺などの古寺跡が多くあることからも山上峰は修験が活況であったことが窺い知

ることができる。また南北朝期に畑時能が籠った鷹巣城（高須山標高４３８ｍ）の西麓には泰澄開基の糸崎寺があり、鷹巣城の支城として糸崎城が機能していたことを鑑みても修験の存在が窺われる。（付図2参照）

坂井・丹生郡境山塊図（付図2）

なお余談ながら『山々のルーツ』[5]によれば「大乗院尋尊大僧正記」に「尋尊は国見岳に登山し、中腹にあった白毫寺寂静院で休息した」と記すという。当山塊に山林寺院が所在したとすれば、貴重な資料であり、その記事を検証してみた。確かに尋尊記には「国見嶽エ登了、於白毫寺寂静院茶所望之了」と記す。しかし尋尊は奈良興福寺大乗院に常住しており、越前に下向したことを示す資料はなく、尋尊が奈良を一望できる国見山（標高６８０ｍ）に登る道中で白毫寺寂静院に立ち寄ったと記しているにすぎなく、白毫寺が奈良国見山麓に所在する訳でもない。付記しておく。

また金屋の地は日野川・足羽川の合流地で深く淀んだ川が山地の東端に沿って北西側に流れている。それは禅師峰寺あたりで真名川・九頭龍川が合流して山地の東端を西流する立地によく似ている。

ともあれ筆者は前稿で禅宗寺院の草創は旧仏教寺院か修験の山林寺院からの派生であることを論じたが、弘祥寺・大孝寺もまたその範疇であったように思う。

前述の山林寺院跡が常在院であったと仮定すれば、禅僧の義演和尚が旧仏教系山林寺院に対して禅宗寺院の開基たる働きをしたとみなせよう。よって筆者は貞和二年（暦応二年の誤記か）に広景が義演和尚に帰依したとする記述は伝承をベースにして広景に擬して作られたものであったように思う。つまり永平寺第四世義演が永平寺退去後に報恩寺に閑居し、世間との関わりを絶ったと伝えられることを、白山越前禅定道にある修験寺院報恩寺とみる立場にも通じる。加えて道元が入越を為したのは吉田郡吉野の蔵王権現をはじめ禅師峰や大仏寺などの修験系によることが大であったとしていることにも通じる。

以上の推定が正しければ、曹洞禅の第一伝たる道元法系の義演から、第二伝たる東明慧日法系の別源円旨に繋がる初めての事例となろう。

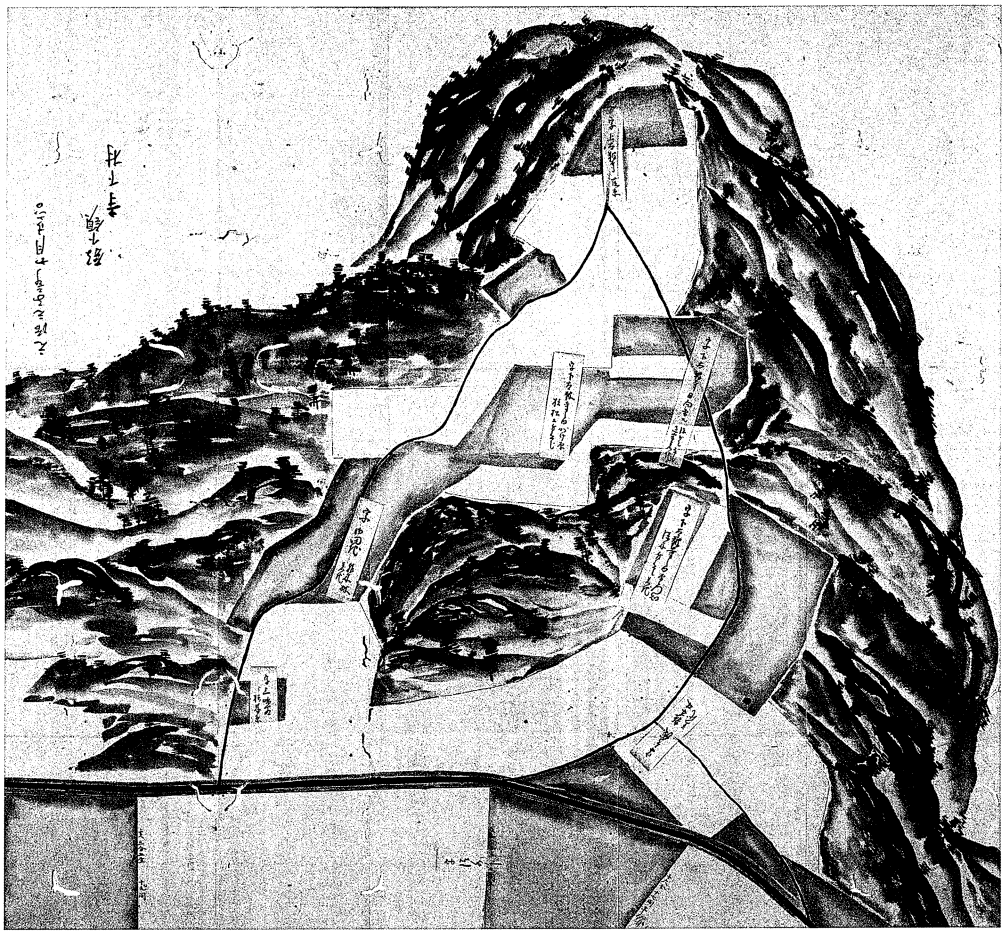
・寺下村絵図の意義

松平文庫蔵の当絵図は元治元年（1864）の作成であるが、次の重要な意義をもつ資料と考えられる。

① 当区域の耕作可能地の成立時期は近世以前であると考えられること。

② 朝倉氏が当地を退転したために、金屋村の管轄外の区域を新村として寺下村を分

寺下村絵図（付図３）



立させたものと考えられる。

よって弘祥寺・大孝寺・常在院の所在地を考察する上で極めて重要な意義をもつものと考えられる。以上の観点に立って該地の遺跡を考察してみたい。

・山林寺院跡と思しき場所は元治元年（1864）の「殿下領寺下村絵図」[6]によれば、「上太報寺　葭原」と記されており、近世末期には「葦原」として活用していたようだ。（付図3参照）

（ただし太報寺の報の字は報の旁が皮となっているが誤字と考えられる。）

さらに明治十四年の「金屋村山林地籍図」によれば、七字長者屋敷に田と記されており、近代初期には水田として活用されていたようだ。

・弘祥寺跡については「寺下村絵図」に寺下村地（金屋村の枝村）として「字御田地・雑木林・荒地」と記され、金屋村田地の山手側に位置したため、耕作を放棄していたと考えられる。さらに右上方に「字下太報寺之内・がけ原・杉松等付有之」と記された地が記されている。そのあたりには平地がないことか

ら、「崖原」とあるように斜面地ではないだろうか。加えて弘祥寺の最谷奥（山林寺院跡より約５０ｍ下方）には奥行き２０ｍ幅１５ｍの庵程度が建つほどの開削地が認められ、「寺下村絵図」には平地が記されているが、特記は無い。

「金屋村地籍図」では二字寺谷となっており、弘祥寺跡は全て田地となっている。

・大孝寺跡については「寺下村絵図」に現在の墓地あたりを「字下太報寺之内・平右衛門畑・漆木付有之・荒地」と記し、その上方には山地を越えて「字下太報寺・日向平・漆少し有之・過半荒地」と記し、現在は「安居城跡」と称されている地と考えられる。区画地が狭隘であり、飛地でもあり、ここを「大孝寺跡」とは認めがたい。

ところが「下市村地籍図」二十九字亀山では溜池より上方の谷地とその西方は金屋村地と記されている。「金屋村山林地籍図」の五字大幸寺には前述の溜池の上方の谷地に区画地が認められる。「五字大幸寺」の字名といい、区画規模といい、ここが「大孝寺跡」と考えられる。

1・3　常在院の規模について

常在院の規模について検討を加えたい。

（心月）寛正四年七月十九日八十四歳而逝去矣、心月葬礼并中陰五十日於常在院営之、

とあって、寛正四年（1463）に五祖教景（心月）の葬送と中陰を常在院で営んだという。何故、弘祥寺や大孝寺があるのに常在院で葬送・中陰を営んだのかを年表によって探ってみたいと思う。

・年表

1342　康永元年　弘祥寺開創
1364　貞治三年　弘祥寺甲刹
1401　応永八年　弘祥寺大仏殿建立
1402　応永九年　弘祥寺十刹位
1407　応永十四年以前　安居大孝寺移転
1442　嘉吉二年　弘祥寺仏殿再興
1450　宝徳二年　六祖教景（固山）死去
1458　長禄二年　長禄の合戦始まる
1463　寛正四年　五祖教景（心月）死去

常在院で葬送及び中陰を行う

1466　文正元年　慈視院光玖安居に打入り、一条家領直務代官を追出す
同年安居を奪還される
1467　応仁元年　応仁の乱始まる
1468　応仁二年　朝倉党越前を追われる
同年安居奪還
1471　文明三年　第一代孝景守護
1548　天文十七年以前　第四代孝景弘祥寺の方丈・仏殿・僧堂再建

長禄の合戦以降、朝倉氏にとって安居の地は不安定であったようで、弘祥寺・大孝寺も不安定であったようだ。そこで前掲のとおり常在院も紫岩和尚の開山となる寺院であったので、この寺が選定されたのではなかろうか。とりわけ筆者の推定する山林寺院が常在院であったとすれば、山上（標高１８０ｍ）に立地する寺院は静謐であり、こうした騒乱の中、葬儀や法事を行うに好適な地であったと思われる。前述のとおり約一町歩もの敷地は庵程度の規模をはるかにしのぐものであり、寺院規模とみられる。

1・4　大孝寺の草創地はどこか。

「伝記」には

三尾野建立大孝寺、請紫岩為開山、

とあって、紫岩和尚が三尾野に大孝寺を建立したとある。しかるに「天祥和尚録」[7]には

《真讃》

母谷山大孝開山紫岩和尚　小師説上司請
克家之子紫岩禅師、幹父之蠱、祖業丕承、如
錫谷来白鵠、浮山夢青鷹、母谷峰下開基、記
曹山孝満、逢梁橋辺過水、（後略）

母谷峰の下に大孝寺を開いたとある。大孝寺の山号　母谷山は山地の地名とみられるが、今はこの山名は不明である。しかし「逢梁橋」は弘祥寺の十境に記されており、大孝寺は弘祥寺の近傍地であることは明白である。また福井市金屋町の山地の五字大幸寺は弘祥寺の旧跡地の二字寺谷の東側に隣接する谷地であることから、ここが大孝寺の旧跡と考えられる。

また「天祥和尚録」の成立は天祥一麟の示寂の応永十四年（1407）以前であろう。この天祥は九条家出身の著名な文筆僧である。朝倉氏の本拠地安居の足羽御厨は九条家の旧領であることに加え、天祥は別源の法嗣の玉岡如金とほぼ同年代で親しくしていたことから、[8] 玉岡を通じて紫岩の肖像画の讃を求めたようであり、この記述情報は玉岡筋からの提供ではなかったか。よって信憑性は高いものと考えられる。

なお天祥の本師の龍山徳元は入元して古林清茂に師事し（金剛幢下）、五十年経た後に帰国し、義堂周信、絶海中津、夢窓疎石などの著名な文筆僧を輩出した。よって龍山と別源とは共に古林に直接教えを受けた金剛幢下であって、その子弟となる天祥と玉岡とは共に金剛幢下の文筆活動での仲間内であった。なお紫岩の文筆活動については次項で取り上げる。

また何故、「伝記」は紫岩和尚が三尾野に大孝寺を開いたと記したのか。「伝記」の記述者は朝倉氏と関係の深い五山僧と推定されるから、地理感のある朝倉氏関係者が安居の南方10kmほどの三尾野と混同するとは考えにくい。「伝記」の二祖高景の記述中に朝倉氏は貞治五～六年の政変で反斯波氏側になって「城中ノ兵一同ニ切岸ヨリ落チ重ル処ヲ吉光・秋光・三尾野・天谷・代崎等思々ニ取頸ヲ城ヲ破」と敵方（斯波氏）の千秋安居一門と思しき者として三尾野氏が記されている。よってこの貞治五年の政変で没収した三尾野に大孝寺を建立したが、康暦の政変では反斯波氏側に寝返ったことで斯波義将から冷遇され、三尾野は斯波氏に奪還されたため、大孝寺を撤収して安居に移転したと考えたい。

・年表

1284　弘安七年	龍山徳見生誕
1294　永仁二年	別源円旨生誕
1305　嘉元三年	龍山徳見入元
1320　元応二年	別源円旨入元
1327　嘉暦二年	玉岡如金生誕
1329　元徳元年	天祥一麟生誕
1330　元徳二年	別源円旨帰国
1334頃建武元年	紫岩如琳生誕
1342　康永元年	弘祥寺開創
1350　観応元年	龍山徳見帰国
1358　延文三年	龍山示寂（寿七五歳）
1364　貞治三年	別源示寂（寿七十歳）
1366　貞治五年	政変（朝倉氏反斯波氏陣営）
1379　康暦元年	康暦の政変（義将管領就任）
1397　応永四年	玉岡示寂（寿七十一歳）
1407　応永十四年	天祥示寂（寿七十九歳）
1413　応永二十年	以前紫岩示寂（寿七十余歳）

1・5　紫岩如琳について

「伝記」によれば、紫岩和尚の出自について、広景の三男の松尾孫三郎は二男の高景と双六で諍いとなり、高景に討たれた。紫岩は

松尾の遺児であり、広景は長じた後にかたき討ちを恐れ、高景の猶子とし、別源和尚につけて僧籍に入る処置をとったと記す。その後の紫岩の活動をみておきたい。

「雲巣集」[9]には「建仁　如琳　號荊山」とあって、紫岩の前の道号は荊山であり、後に紫岩に変更した。また「一漚餘滴」[10]には「送琳蔵主帰越、月篷時有跛脚之患」とあり、貞治三年（1364）十一月のこととみられ、それまで建仁寺の蔵主を務めていたようだ。さらに「雲巣集」[11]には「荊山座元匀」とあって、座元（前堂首座）の時の道号は荊山であった。

特筆すべきは「雲巣集」[12]に、荊山が弘祥寺住持の任に赴くのを送って建仁寺中の用文侑藝以下十九名が贈った律詩に、各々に対して、荊山が和答した詩軸を書写したものが記されている。（一山派某人和答建仁寺詩軸）[13]

義堂周信の「空華集」[14]に「送荊山琳首座帰越住庵」ともあって、義堂との交流もあった。

さらに義堂が序文を書いた「大慈寺八景」[15]の詩軸には春屋妙葩・天祥一麟・玉岡如金・絶海中津、仲芳円伊（三山曇伊）などとともに荊山が名を連ねている。以上、荊山（紫岩）の文筆活動は五山で活発に繰り広げられており、それに伴い政治向きにも人脈を広げていたようだ。

また年表でみてみると、玉岡示寂後に弘祥寺は十刹位を得ており、紫岩がその活動に重要な働きを為し、十刹位を得た後に住持職をも得たと考えられる。

なお「絶海録」[16]に「次韻賀弘祥荊山長老」とあって、晩年は弘祥寺の長老として活躍していた。なお「天祥和尚録」[17]には「母谷山大孝開山紫岩和尚」とあるから、荊山を紫岩に改めたのは大孝寺を安居に移転したのを機に行われたのではなかろうか。

なお「東山歴代」[18]に「紫岩　弘祥寺○嗣玉岡金見于一庵録○仲方録有紫岩西堂拈香語○荊山如琳後改曰紫岩嗣別源俗姓朝倉開弘祥云々」とある。

『禅籍目録』の異名同書一覧p8に「一庵録→天祥録一庵一麟」とある。なお天祥一麟の室号は一庵であり、晩年は一庵を道号として用いた。ただし両足院蔵本を底本とする「天祥和尚録」には当該記事は見当たらない。なお『東山歴代』の著者高峰は江戸期の両足院の僧で五山研究者であったから、高峰は両足院蔵本を用いた筈であり、当該底本の欠落部に当該部の記載があったのかもしれない。

『禅籍目録』の異名同書一覧p10に「仲芳和尚語録→懶室語録　仲芳円伊」とあるから　「仲方録」は仲芳円伊の「仲芳和尚語録」と同義であるとみられる。「懶室漫稿」[19]に「紫岩西堂拈香」があるが「荊山如琳後改曰紫岩嗣別源俗姓朝倉開弘祥云々」は見当たらない。

仲芳は応永二十年（1413）示寂であるが、紫岩の拈香語を記していることから、紫岩はそれ以前の示寂であることが知れる。また仲芳円伊の旧号が三山曇伊であり、前出の「雲巣集」の詩軸に紫岩と曇伊（仲芳）が名を連ねている。

参考　他に紫岩の関係資料を挙げておく。

① 東海一漚集[20]「和儀則堂韻謝珠荊山諸兄見留」

② 東海一漚集[21]「松岡請荊山疏」

③ 月舟和尚語録[22]「前霜臺英林居士三十三年忌陞座　散説　居士壮年拝紫岩和尚之塔云々」

④ 明極楚俊遺稿「荊山行為寶監寺賦」p1963、「荊山寶監寺」p2007、「和荊山玉首座見呈韻」p2009、「荊渓玉書記」p2020などとあるが、明極は元徳元年1329

に渡来し、建武三年 1336 示寂であるので、紫岩には該当しないと考えられる。また「荊山玉首座」とも「荊渓玉書記」ともあるので、「荊山」は「荊渓」の誤記か、あるいは改号したのかも知れない。

⑤ 禅居集　「琳蔵主参永福古林和尚」p399、「琳禅人之測」p410、「送淋蔵主」p412 とあるが、清拙正澄の渡来前の詩文が含まれるし、清拙は嘉暦元年1326の渡来であり、暦応二年 1339 の示寂であるから、紫岩には該当しないと考えられる。

ちなみに正式には諸山の公帖を得て西堂を名乗れるが、道号を用いることは許されず、如琳西堂となる。十刹の公帖を得てから道号が名乗れ、紫岩西堂となる。そして五山の公帖を受けると、紫岩東堂が名乗れ、和尚（敬称）、長老（俗称）の使用も許される。しかし道号、和尚、長老の使用基準があいまいで、絶対的なものではなかったようだ。

・年表

1314　正和三年　二祖高景生誕（広景六一歳）
1334頃建武元年　紫岩如琳生誕
1342　康永元年　弘祥寺開創（紫岩約八歳）
1352　文和元年　初祖広景逝去（寿九八歳）
1364　貞治三年　弘祥寺甲刹（紫岩約三十歳）
1364　貞治三年　荊山（紫石）如琳建仁寺蔵主
1374　応安五年　二祖高景逝去（寿五九歳）
1388　嘉慶二年　義堂周信示寂（寿六六歳）
1397　応永四年　玉岡示寂（寿七一歳）
1401　応永八年　弘祥寺大仏殿建立
1402　応永九年　弘祥寺十刹（紫岩約六八歳）
1404　応永十一年　三祖氏景逝去（寿六六歳）
1405　応永十二年　絶海中津示寂（寿七十歳）
1407　応永十四年　天祥示寂（寿七九歳）
1407以前　安居大孝寺移転（紫岩七十余歳）
1413　応永二十年　仲芳円伊示寂（寿六十歳）
1413　以前　紫岩示寂（寿七十余歳）

1・6　紫岩和尚の弘祥寺にある塔名

紫岩和尚の弘祥寺にある塔名についてみておこう。「心田播禅師疏」[23]では

藍青岩法兄住越之前州弘祥護国寺
大孝先師塔名也、

とあって大孝が紫岩和尚の塔名という。従って大孝寺は紫岩和尚の塔所と位置付けられていたようだ。しかしながら「幻雲稿」[24]に

宝玉之住越之弘祥同門
公承于紫岩派、々々塔曰霊元、弘祥有甘露泉。

とあって霊元（庵か）が塔所とある。よって後に弘祥寺にも紫岩和尚の塔所として霊元庵が造られたのではないだろうか。

1・7　安居のその他の寺院創立

安居の地にあった朝倉氏関係寺院を検討しておこう。「伝記」に

弘祥寺建立之後、安居ノ弘徳寺并弘善寺了悟庵草創也、

とあって安居の地に弘徳寺と弘善寺了悟庵が草創されたという。

次いで「幻雲文集」[25]には

護田中興開基桃渓悟公禅師肖像
雲合山開寺、雪消水護田、移床方丈室、留碭中興年、
天文元年之夏、功甫丹公西堂、移護田丈室於太冶半山之傍、輪奐之美、與山相輝、初護田在河之東北、距冶山数里、詳見吁寺記、二十余年、苦北兵搶攘、故有此挙、功甫嗣渓悟、悟嗣器成璉翁、璉嗣紫岩和尚、

天文元年（1532）になって護田寺が安居に移されたという。護田寺は初め東北位数里にあったという。「翠竹眞如集二」[26]に

越前河合荘岩坂三十三所巡礼観音安座點眼法語
越之前州河合荘岩坂護田寺慧均監院、乃洞春

定光（別源円旨）之徒也、

と記すから護田寺は九頭竜川の右岸（北方）の河合荘岩坂にあったと記す。現在の森田・中角あたりらしい。加賀の一向一揆との戦いで苦しめられたことが移転の理由だという。

1・8　まとめにかえて

故横山博士は大仏寺山の山腹にある伝大仏寺跡の実地調査を行い、「当伝承地は永平寺の前身たる大仏寺跡ではない」との結論を記した後に「但し称大仏寺跡にもかって建物のあったらしい軒石の列や、築庭組石の痕跡は認められるから何時か永平寺関係の庵室でもあったのであろう。」[27]と記している。

筆者は仮に該地が近世の遺構であるとした場合においても、近世に約1ヘクタール（350坪）もの開削工事を行ったとは考えにくく、中世の遺構を再活用したと見るほうが合理的と考えられる。つまり山林寺院遺跡と考えるものである。

それにつけても、こと伝大仏寺跡に関して故横山博士が論じてから、半世紀を過ぎた今日おいても、博士の論考を超えた研究が出現していない。

禅宗史研究を概観するに、文献史学一辺倒の感がある中で、『禅の建築』の著者故横山博士がその脱皮の先駆けであったように思う。しかし半世紀を経た今日においても博士の論考を参考文献に挙げざるを得ない現実に直面し、文献史学の限界?との認識が希薄なのではないのか。新しいアプローチが待たれる思いを禁じ得ない。

こうした現状認識の下で、弘祥寺・大孝寺背後の山上にある開削平地が山下の寺院開創に関る山林寺院跡であるかどうかを論じることができるのは、いつのことになるやら。

若い世代に期待をつなぎたい。

2　越中崇聖寺・加賀安国崇聖寺について

前稿で越前崇聖寺について記した。しかし北陸には越前の他に加賀と越中に同寺号の寺院があって共に諸山位を得ている。この関係性の解明を課題としていた。この点を追求したいと思う。

『扶桑五山記』によれば「諸山」に「越中州萬松山崇聖禅寺　一曰山名海陽、源竺山、嗣曉白雲」と「能登州萬松山安国禅寺　開山清拙大鑒禅師」と「加賀州安国崇聖禅寺」が記されている。整理すると

・越前雪峰山崇聖寺

永徳元年（1381）　開山天境霊致（大鑑派後に一山派）、開基斯波満種、

・能登萬松山安国寺

開山清拙正澄（大鑑派）、開基不詳、嘉吉元年（1441）以前諸山、[28]

・加賀萬松路山安国崇聖寺

開山雙峰宗源（聖一派）、開基不詳、応永十年（1403）以前諸山、[29]

・越中萬松山崇聖寺（別号海陽山）

開山竺山至源（聖一派）、開基不詳、康安元年（1361）以前諸山、[30]

斯波満種の法名は「崇聖寺殿道源大江」であるから、越前崇聖寺の開基は斯波満種とみられる。越前崇聖寺は大野にあり、満種の父の義種以来の知行地であった。また加賀も義種が守護職を得（1387）、満種も踏襲した。能登と越中と満種との関係は不明である。

聖一派（東福寺派）に属する越中崇聖寺と加賀安国寺を考察してみたい。『禅宗地方展開史の研究』では越中興国寺は越中崇聖寺と同じ聖一派栗棘門派（白雲下）であり、開基

は越中守護の桃井直常であり、越中安国寺もまた同派に属していたとの見解が示されている。[31]また「軍事的・政治的・交通上の要地に十刹・諸山をはじめとする五山派寺院が存在し、…寺町の崇聖寺などは守護の越中支配上、重要地点と考えられる場所に存在し、守護との関係がうかがわれ、その越中支配上における宗教的拠点としての役割を担ったのであろうことが十分考えられる」[32]との見解が示されている。

加賀安国寺も東福寺末であった。前述のように加賀守護も斯波義種であり、安国寺は守護と密接な関係にある五山派寺院にのみに限られており、越前崇聖寺と同一の開基と考えられる。

次いで能登安国寺を考察してみたい。安国寺は守護と密接な関係があったことが知られるから、能登守護の吉井頼隆・氏頼が開基であったかもしれない。しかし能登は守護の交代が著しいので安国寺も変遷した可能性が高い。

以上、明確な関係性は掴めなかったが、越前・越中・加賀の崇聖寺は同一の寺号であり、能登安国寺と加賀崇聖寺と越中崇聖寺は同じ山号であり、能登安国寺と越前崇聖寺は大鑑派、加賀安国寺と越中崇聖寺は聖一派により創立されたのであり、前掲の四ヶ寺は何らかの作為的なものを感じる。あるいは足利氏による政治的思惑が反映した可能性も考えられようか。

なお「東山塔頭略伝」[33]の「興雲庵」には「大鑑禅師同受業于月渓故師東渡後与大鑑不忘久要平生相親是以一山大艦両派法系雖異古来修同門」と記す。つまり一山下の石梁下の系は法系が異なるが大鑑派（清拙）と同門として活動したとある。よって大野崇聖寺開山の天境霊致が大鑑派・一山派とあるのはこの事情によるものと考えられる。[34]

石梁下の朴堂祖淳（一山派）は越中新河郡の人であるが、加賀安国崇聖寺に入院したことや、晩年に故郷の越中吉祥寺に退去したことも係わりがあろう。なお同派の河清祖瀏は「晩居越前州宝応寺有頑雲集」[35]とあって一乗谷宝応寺に晩居したとある。付記しておく。

なお前稿で「春苑住越崇聖諸山」を挙げて寛正三年（1462）の春苑入院までに越前崇聖寺は諸山位を得ていたと記した。しかし「越崇聖寺」に該当する寺院は三ヶ寺あり、「春苑住越崇聖諸山」はどの崇聖寺かを絞り込むことができない。しかも越中と加賀の崇聖寺は寛正三年以前に諸山位を得ていたから、前稿の記述は筆者の早とちりであった。

余談ながら、越前では五山系資料で斯波氏と聖一派の記事は非常に少ない。例えば別源が開山となった越前善応寺の開基について触れるところがない。その所在地からみて開基は斯波氏であった公算が強い。非常に不審と言わざるを得ない。これは斯波氏の被官であった朝倉氏が戦国大名として越前を席巻したことと、その朝倉氏が越前出身の別源属する曹洞宗宏智派を外護したことに起因すると考えている。つまり朝倉氏関係者がそれらの記事を削除したか捏造したことが疑われる。聖一派についても聖一派に属する越前出身の古源卯元と無徳至孝がいるが越前での活動が伝えられていない。今後の大きなテーマとしたい。

3　前稿の訂正

前橋[28]を記した後に新たな研究成果が示された。

①「宝慶由緒記」の否定[29]

・「宝慶由緒記」は近世の所産であり、寂

円渡来説と三代相論は近世の所産である。

②「建撕記」の今南東左金吾禅門覚念の否定[30]

・今南東左金吾禅門覚念は当時の著述物にその記述が見えない。後世の著述「建撕記」が初出となる。

・加えて江戸期に「覚念の北村真柄の先祖」が加筆された。

③小松妙覚寺の否定[31]

・江戸期の面山の手で加筆された。

以上は熊谷忠興師が諸文献の書誌学的究明によって明らかにされた。

筆者は上述の三項について、その研究成果を受け入れ、前稿の一部を修正するものである。筆者の前稿の否定する事項を列記する。

①1・2項「永平寺四世義演閑居の地報恩寺について」の「①永平寺三代相論について」の記述は全面的に見直す。後日、万全を期したいと思う。

②2項「寂円派による展開」の「はじめに」に「寂円は道元をしたって来日し」を削除「寂円の嗣法は三系の混合」を削除

③1・4項「日円寺について」の「①道元の帰洛ルート」と「②日円寺の草創について」の記述は全面的に見直す。後日、万全を期したいと思う。

④1・3項「小松妙覚寺について」の記述は全面的に見直す。後日、万全を期したいと思う。

参考　1472。文明四年頃　建撕記成立

4　附説　御影か御願かについて

「伝記」には「常在院御影【願】」の文言が記されている。ただし『朝倉氏の家訓』と『越前朝倉氏の研究』ではその翻刻文字に違いが生じている。まずこの点を解明しておきたい。

・A朝倉家系図

空海（広景）―無極乗用（松尾三郎）―紫岩和尚（大孝寺并常在院御影【願】也）

・B大功（三祖氏景）

常在院御影【願】紫岩和尚

【　】内は『朝倉氏の家訓』の翻刻

Aの原文を付図4

Bの原文を付図5

Aでは偏の第一角目に点があり「京」と読める。よって「願」と読むことには抵抗がある。

付図4

付図5

Bでも偏の第一角目に点があるようにも見えるが、行人偏の第一角目の下部とも見える。以上、原文では「影」か「願」か判別できない。

次いで文脈から検討を加えたいと思う。「御影」の用語については「デジタル大辞泉」は「影堂」について「一寺・一宗の開祖または一家の祖先の像や位牌を祭る堂。御影堂・御霊屋」とある。

また相国寺の塔頭の頭分としての鹿苑院は足利義満の御影堂、大智院は義視の御影堂、常徳院は義尚の御影堂とあり、御影堂は開基旦那の御影を安置礼拝する堂宇として位置付けられている。つまり室町期の五山派寺院に於いては開山の塔所と重なることもあるが、専ら将軍の御影所であり、決して開山の御影堂ではないのである。

前出では「常在院開基義演和尚」と記されていることから、「常在院御影」とは「常在院開基義演和尚」と同義であるはずであり、「紫岩和尚　大孝寺并常在院御影也」、「常在院御影紫岩和尚」と読むことは無理がある。

次いで「御願」についてみておこう。「デジタル大辞泉」では「御願」について「貴人の祈願・立願に敬意をこめていう語。御祈願・御立願」とある。「御願寺」については「天皇の御願を修する寺の意で、官大寺に対し、皇室の私寺として営まれた。また貴族や僧侶の建立寺を奏請して、御願寺とした場合もある」と記す。

「伝記」には、「弘祥寺を亀山法皇の御祈願所定む」

足利尊氏「御立願御寺三ケ所可有御建立也」

朝倉広景「弘祥寺を建立せんと願を立つ」

と記す部分がある。そして原文では「御祈願所」・「御立願」・「願を立つ」の三ヶ所は行書体つまり楷書に近いくずしで書かれているのに対し、「御願」は草書体で書かれている。よって前掲に比べ、AとBはそれほどの敬意を払って記されていない点も考慮する必要があろう。

また「松尾息ハ大孝寺并常在院之開山也。此レ紫願和尚是也、三尾野建立大孝寺、請紫岩為開山」ともある。

ここでは開山と記しながら、AとBは「御願」と記すなど一貫性を欠いているが、「御願」は「開山」の意として記されているようだ。

なお妙法寺、永徳寺の例をみても草創開基は無視され、再興後の中興が「開山」と称されている。また前出の通り「常在院開基義演和尚」とも「広景の師」とも記したこともあって、草創開基を無視することになる「開山」と記すことに憚りがあって「御願」を用いたのではないだろうか。

5　おわりに

この稿を書くきっかけは、懇意をいただいている熊谷忠興師からの1本のメールであった。「伝記」にある「常在院開基義演和尚」とは永平寺第四世義演和尚のことではないかと。筆者は前稿を記した後に刊行された『朝倉氏の家訓』『越前朝倉氏の研究』は目にしていたのだが、「伝記」の重要性を見落としており、このメールで喝目した次第である。

翌日早速、弘祥寺・大孝寺跡を探索して、その山上に山林寺院跡を見出し、永平寺第四世義演和尚の常在院跡であることを確信した。

話は飛ぶが朝倉氏全盛の頃、月舟寿圭は越前に招かれ、実に多くの著述物を残しておいてくれたが故に当時の様子を我々に多くを知らしめている。それにつけても郷土出身でもない月舟がこれだけ多くの事柄を知り得たのか。恐らく月舟は多くの文筆僧を擁して参考文献を収集して記したものと考えられる。

松原氏は『越前朝倉氏の研究』の著述の中で、「伝記」の著者は朝倉氏と関係の深い五山禅僧ではないかと。

また熊谷氏は「建撕記」を著した建撕の許には参考文献等の情報を収集した多くの記者僧を抱えていたようで、「建撕記」は小説とみるべきだと。

ともに卓見であり、著者に意義深い示唆を頂いた。また両者にはいろいろと厚誼を頂戴した。厚く御礼申し上げる。

1　「越前の禅宗草創期について」『若越郷土研究53―1』筆者著

2　「朝倉家伝記」『朝倉氏の家訓』福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館古文書調査資料2　p232　平成20年

3 「壬生本朝倉家譜」『越前朝倉氏の研究』p486
松原信之著　平成20年
4 「春沢録」『一乗谷の宗教と信仰』（第10回企画展）p20
福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館　平成11年
5 『越前若狭山々のルーツ』上杉喜寿著　p266
『大乗院寺社雑事記　第3巻』24寛正二年十月三日 p54
6 「足羽郡寺下村絵図」『福井市史　絵画・地図編』p106
「殿下領寺下村絵図」元治元年『松平文庫』福井県立図書館蔵
7 「天祥和尚録」『五山文学新集　別巻2』p385
8 「天祥和尚録」p366 p372 には玉岡との交流を物語る詩が収録されている。
9 「雲巣集」『五山文学新集　第4巻』p784
10 「一瓢餘滴」『五山文学新集　第4巻』p589
「東海一瓢集」『五山文学全集　第2巻』p891
11 同前9 p797
12 同前9 p791　p1264
13 なお「雲巣集」の作者について玉村氏は「在庵普在弟子某僧」と不祥としているが、『空華日用工夫略集』辻善之助編　p16には「祥麟普岸」としている。また『新纂禅籍目録』p17には「正鏈著」とある。
しかるに『日本禅宗史論集』下之一には再考して「祥麟普岸」p10を挙げ、再々考して「南渓宗建」p29を挙げている。
14 「空華集」『五山文学全集　第二巻』p1610
15 同前9 p784
16 「絶海録」『絶海語録　二』梶谷宗忍訳注 p81　p360
17 同前7
18 「東山歴代」高峰東晙編、建仁寺両足院蔵本写本、東大史料編纂所蔵本複写本
なお当資料には「荊山如琳」の項もあって、当稿作成に大いに参考となった。
参考までに『玉村竹二氏旧蔵資料目録』によれば「禅僧史料集成稿」として、曹洞宗宏智派に限った禅僧七十五名の草稿の存在を載せている。越前中世の研究に大いに寄与するものと考えられる。P392　p393
さらに『新纂禅籍目録』P433 によれば「扶桑禅林書目」と「合類書籍目録大全」をひいて「別源和尚語録」の存在を記している。付記しておく。
19 「懶室漫稿」『五山文学全集　第3巻』p2605
20 「東海一瓢集」『五山文学全集　第2巻』p879
21 同前　p927
22 「月舟和尚語録」『続群書類従　第13輯』p244
23 「心田播禅師疏」『五山文学新集　別巻1』p800
24 「幻雲稿」『続群書類従　第13輯　文筆部消息部』p130
25 「幻雲文集」『続群書類従　第13輯』p392
26 「翠竹眞如集二」『五山文学新集　第5巻』p857
27 「曹洞宗伽藍建築の研究1」注23 p18 横山秀哉著
『東北大学建築学科建築学報　第3号』1955・03
「道元禅師の伽藍観について―大仏寺跡考」横山秀哉著 P15『宗学研究　第20号』　1978年
28 『中世禅宗史の研究』今枝愛真著 p120　注38
29 同前　注39
30 同前　p245　注174
31 『禅宗地方展開史の研究』広瀬良弘著 p99
32 同前　p129
33 「東山塔頭略伝」高峰東晙編、建仁寺両足院蔵本写本、東大史料編纂所蔵本複写本
34 『日本禅宗史論集』下之二には「大鑑派と一山派の盟約」P243の論考がある。
35 同前33「興雲庵」
36 前掲1に同じ
37 「宝慶由緒記の成立とその背景」熊谷忠興著 P212
『禅と地域社会』広瀬良弘編　2009年
「建綱と建撕の関係」p73　熊谷忠興著
『宗学研究　第四十九号』2007年
同前 p99『宗学研究　第五十号』2008年
38 同前　予稿『宗学研究　第五十一号』2009年
39 熊谷忠興師の口頭での教示による。